

# 室町の五山と王権

## —カイロ・マムルーク朝スルタンとの比較を通じて—

今谷 明 IMATANI Akira

国際日本文化研究センター

仏大革命前夜に活躍した英国の歴史家、エドワード＝ギボンは、大著『ローマ帝国衰亡史』の最終巻あたりで、モンゴルの世界制覇を叙述したが、その中で蒙古は三地域に於て征服に躓いたとしている。一つはいうまでもなく日本で、それは季節的暴風雨による不可抗力であったとするが、注目されるのは、他の二地域である。一つは中東（西アジア）地方で、ギボンは次のように記す。

エジプトはもしも軟弱な子孫だけで護られていたならば疑いもなく征服されただろうが、その幼時にスキタイの凜烈な空気を吸っていたマムルーク王朝は武勇では相手に見劣りせず規律では勝っていたために、数多くの戦場でモンゴル人と勇敢にわたり合つてこの敵軍の潮をエウフラテス東岸へ押し戻した。（中野好之訳、筑摩文庫版巻10）

このように、当時エジプトに拠っていたイスラム政権のマムルーク朝は、怒濤の蒙古騎馬軍団を「武勇」「規律」によって北方へ撃退したことを強調している。（今日この戦闘は1260年のアイン・ジャールートの戦いと呼ばれ、マムルーク軍団が“イスラム世界の防衛者”として支配の正当性を獲得した重要な戦役であると認識されている<sup>1)</sup>

他の一方とは、いうまでもなくヨーロッパである。バトゥーの大軍はポーランドのリーグニツ（ワールシュタット）の戦いで西欧連合軍を大破したにもかかわらず、何故か蒙古軍は南転してハンガリーへ向つたが、ギボンはその事情を

一方タタール人（蒙古人）の側も実はフランク人の名声と武勇に恐れをなして、オーストリアのノイシュタットの町への彼等の攻撃は50人の騎士と20丁の石弓で勇敢に防衛され、彼等はドイツの一部隊の来援で包囲を解いた。

と、オーストリアに於て頑強な抵抗にあつて、止むなくバルカンへ南下、転進したこと叙している。

さてそれでは、日本の対蒙古戦役（文永・弘安の役）は、“神風”という天佑がなければ日本に全く勝目がなかった戦争なのであろうか。近年の研究では、文永の役（1274）に於ては、日一蒙間は数日に亘つて筑紫平野で戦い、長期占領は困難とみた蒙古軍が自発的に引揚げたものであること、蒙古軍を襲った風雨は帰途玄界灘で起つたことが事実と考えられている。<sup>2)</sup> また弘安の役（1282）では、元軍は九州本土に上陸すらしておらず、日本

側の構築した防壁に阻まれ、たとい台風の襲来がなくとも、いずれ元軍は撤退を余儀なくされたことは確実というのが通説になっている。以上によって、蒙古の騎馬軍団は、日本・エジプト・ドイツの3ヶ所では、強力な抵抗にあつて、当該地の武力に撃退されたのである。この三地域のうち、西欧と日本とは早くから、封建制の類似ないし併行的発展が指摘されてきた。<sup>3</sup> そこで本稿では、日本の中世とマムルーク朝の国制について若干の比較を試み、その両者の類似点と相違点から何が言えるか言えないかを論じてみたい。

マムルークとは、中世イスラム世界の各所に出現した奴隷軍人の謂であり、やはり蒙古がユーラシアに猛威を振った13世紀に、インドに於て元軍に抵抗してその征服下に入らなかった奴隷王朝（パタン王朝）が知られている。シリアに於てモンゴル軍を押し返したマムルークは、カイロのナイル川中のローダ島で養成されたキプチャク系の軍団であつたという。その後、軍団はキプチャク系からチュルク系に移行したが、一貫してシリアとエジプトを統括し、1516年のマルジュ・ダービクの戦いでオスマン朝に敗れて併合されるまで、中東を支配し続けた。

奴隷軍団の起源については、アラブ学者や日本の研究者の間で、種々に論じられているが、佐藤次高氏は「アッバース朝の、政治的動揺からカリフに対する忠誠心のあつた『私兵』が必要とされた」旨を強調している。いずれにせよ、マムルーク軍団の源流が、マワーリー軍団と称される非アラブ軍の形成にあることは諸説一致しているようだ。清水和裕氏によれば「アラブに征服された非アラブ系住民が、アラブと特権的に結びついたマワーリー *mawālī* として、社会的な地位向上を果した」ことが、非アラブ軍団形成の背後事情にあることは確かとみられる。

ここで注目されるのは、アラブと非アラブのパトロン（保護者）—クライアント（被保護者）の関係で、これがマワーリーを軍事力として用いる道を開いたと考えられていることである。マワーリーには、様々なあり方が存在したようであるが、清水氏の規定のように「その最も重要な性格は、ワラーが主人と従属者の間に結ばれる、法的に保証された個人的紐帯であつた」とするならば、日本の武士団の勃興とその封建制的関係に極めて似通つた軍団の性格がみられたということになるであろう。<sup>4</sup>

次に、マムルーク朝と日本の室町時代の社会について、学院（マドラッサ）の建設という視点から観察したい。日本の禅宗は、鎌倉初期に栄西や道元によって中国から導入された。封建王政をスタートさせた武家＝幕府によって王権を外護する宗教として重んじられ、鎌倉に五山が、京都に建仁、東福の2寺が創建されたが、首都に於る学院（マドラッサ）として大々的に整備したのは、室町幕府の3代将軍、足利義満である。

南北朝時代（14世紀）はなお南都北嶺を中心とする旧仏教の力が強く、京都を首都とした王権＝幕府が禅院を拡充することに抵抗があり、14世紀半ば（義満が幼将軍で、管領の細川頼之が執政した時期）には、新築の南禅寺楼門が、叡山の圧力で破壊、撤去される事件があつた。しかし、1379年執政を始めた義満は、積極的に財源を投じて南都北嶺の旧仏教を懐柔し、彼等を無抵抗にした上で、南禅・天竜・相国・万寿以下の禅院を或いは復興或いは新設し、南禅寺の下に天竜・相国・万寿・建仁・東福の諸寺を配置する五山

制度を完成した。

広大な伽藍を擁する五山には、室町幕府が南北朝内乱の敵方であった南朝や、謀叛して亡んだ有力守護大名から没収した厩大な欠所地（荘園）が寄進された。これら潤沢な財源によって、五山に於ては仏事・法事（宗教儀式）だけでなく、漢詩文の創作、儒教や中国史書・古典の講読と研究が行われた。さらに漢籍・古典の印刷出版も五山が行った（五山版）。新しい儒学である朱子学や『孟子』の講義は、義堂周信（1325-1388）らの禅僧が14世紀末に五山で行ったのが最初である。<sup>5</sup>

義満は將軍を辞し出家するが、室町殿（足利氏家督）として政治を行い、公家・武家・寺社の三大権門の頂点に立った。自らは北山第に住んだが、しばしば洛中洛外に出遊し民衆の面前で演技（パフォーマンス）を行った。毎月七日間の祈祷（宗教儀礼）を自ら主催し、昼は顕密の高僧を北山第の壇所に集めて仏教の法会を、夜は陰陽寮頭（陰陽道の最高司祭）の土御門有世の私邸で、中国の道教思想に基づく陰陽道祭を実施した。以後、天皇や上皇は日本では民衆の目に触れることは少なくなり、専ら室町殿が、世俗王・祭祀王として民衆に君臨することになった。<sup>6</sup>

このような王権と宗教のあり方は、イスラム世界のスルタン、とくにマムルーク朝治下のスルタンの儀礼や学院の建立に似通った面がある。例えば王権による五山の整備は、スルタンによる学院（マドラッサ）の建立に対応し、土豪・農民による土一揆と徳政令公布は、カイロの食糧暴動とスルタンによる財務長官の罷免に対応する。將軍義政が米価つり上げを計る米商人を処刑したり、將軍義政が勸進聖の僧顔阿弥に命じて飢民救済の粥施行実施した等は、いずれもマムルーク朝スルタンに類似の対応行動が見られる。<sup>7</sup>

以上のように、マムルーク軍制と日本の武士団統御（御家人制）のあり方に、極めて共通する側面があること、および、日本の室町政権とエジプト中世王朝に併行現象がみられる事実は、両地域の封建制度に共通性があること、天皇と將軍（室町殿）、カリフとスルタンという王権（権力と権威の分離）のあり方に共通点が認められることと、無関係ではないだろう。さらにつけ加えるならば、モンゴルの征服の嵐を撃退した日本、エジプト、中欧の各地に発達した封建制の意義を考える上でも、大きな意味が認められよう。モンゴルの征服によって、ユーラシア大陸に広大な統一世界が形成されたこと（タタールの平和）に大きな世界史的画期があるとすれば、その征服運動に抵抗して封建制を守った日本、中欧、中東の三地域のその後の展開にも、大きな世界史的意義が認められると思うのである。

1 清水和裕氏「マムルークとグラーム」（『岩波講座 世界歴史』巻11）

2 九大教授 服部英雄氏の近年の研究および九大名誉教授川添昭二氏の研究による。

3 福田徳三著『日本経済史論』、堀米庸三「封建制再評価への試論」（『展望』87号）

4 以上、マムルーク軍制の沿革については、清水和裕氏前掲論文による。

5 和島芳雄著『日本宋学史の研究』吉川弘文館

6 拙著『室町の王権』（中公新書）

7 長谷部史彦氏「王権とイスラーム都市—カイロのマムルーク朝スルタンたち」（『岩波講座 世界歴史』巻11）